

## (2) 景気動向指数 (D I) の作成方法

2008年3月まではD Iを中心に公表されていた。

### 目的

D Iは景気に敏感な諸指標を選定し、そのうち上昇(拡張)を示している指標の割合を示すものであり、景気局面の判断、予測と景気転換点(景気の山・谷)の判定に用いる。変化の方向性を見る。

### 作成方法

採用系列の各月の値を3ヵ月前の値と比較して、増加した時には+を、保合いの時には0を、減少した時には-をつける(変化方向表)。

その上で、先行、一致、遅行の各系列群ごとに、採用系列数に占める拡張系列数(+の数)の割合(%)をD Iとする。

$$D I = \frac{\text{拡張系列数}}{\text{採用系列数}} \times 100 (\%)$$

\* 保合いの場合は0.5としてカウントする。

### D Iの利用の仕方

D Iには、景気に対し先行して動く先行指数、ほぼ一致して動く一致指数、遅れて動く遅行指数の3本の指数がある。

先行指数は、一般的に、一致指数に数ヵ月先行することから、景気の動きを予知し、遅行指数は一致指数に半年から1年遅行することから景気の転換点や局面の確認に利用する。

景気動向指数の動きから景気局面を判断する場合、次のような観点を考慮に入れることが適当と考えられる。

### 【期間】

景気拡張または後退の期間が極めて短い場合は、景気拡張または後退と考えることは適当ではない。

### 【景気局面の判断】

一致系列の各D Iの指数のすべての指数がマイナスであればゼロ%、すべてがプラスであれば100%だから、この指標はゼロと100の間を動く。50%ラインを上から下にきる時点が景気の山で、下から上に切る点が景気の谷である。50%より上の時期は、過半数の指標がプラスなのだから景気は全体とし

て上昇局面にあり、50%より下の時期は全体として下降局面にあるからである。

### 【景気波及の度合い】

D Iは景気の各部門への波及の度合いを表すものであり、景気変動が多くの部門に波及した時が景気の転換点と考える。

景気がいいか悪いかは一応50%ラインが目安だが、近年、部門間のばらつきも目立ってきているので、景気局面を判断するに当たっては、大半の部門の景気変動が波及している(したがってD Iが100%あるいは0%に近い)ことを確認することが必要である。

### 【経済活動の変動の度合い】

景気変動はある程度の振幅を伴う。例えば、経済活動水準の低下が下げ止まっても上昇を示さなければ景気拡張に転じたとは言いがたい。同様に、経済活動の落ち込みが軽微で高水準を維持していれば、やはり踊り場とみるのが適当である。

なお、D Iは変化率を合成したものではないので、D Iの水準自体の変化は景気変動の大きさないし振幅とは直接的には無関係である。

## (3) ディフュージョン・インデックス表

\* すべての系列が公表されていないときは、指数の値にPがついている。

[引用：内閣府ホームページ]

#### (4) コンポジット・インデックス

2008年4月よりC Iを中心に公表されている。

##### 目的

C Iは景気に敏感な指標の量的な動きを合成した指標であり、主として景気変動の大きさ(量的)や強さを測定することを目的としている。

##### 作成方法

採用している各系列の変化量を平均し、累積したうえで、指数化するものである。

##### C Iの利用の仕方

C Iでは、一般に、一致指数が上昇している時が景気の拡張局面、低下している時が後退局面であり、一致指数の山、谷の近傍に景気の山、谷が存在すると考えられるが、景気局面を2局面に分割するのではなく、変化の大きさが景気の拡張または後退のテンポを表しており、その時々<sup>1</sup>の景気の量感を観察することができる。